

大阪くらしの今昔館所蔵品を巡る

大坂画壇の絵師たち

3. 江阿弥(大岡ト信)

大阪くらしの今昔館には近世の大坂画壇の絵師による作品が所蔵されています。それらの中から注目すべき作品を紹介していきます。

江阿弥(元禄6年~?、1693~?)は本姓を安村、名をト信、号を江阿弥、翠松庵、春江といいました。狩野派の系統である大岡春トに絵を学び、大岡ト信・大岡江阿弥とも名乗っています。落款から延享元年(1744)には「法橋」に、宝暦12年(1762)には「法眼」に叙せられていることが分かります。作品は和歌山県立博物館の「和歌浦名草山図」屏風、高砂神社(高砂市)の「從瀧野到高砂之図」絵馬・「猿曳図」絵馬などがあり、さらに如来院(尼崎市)に天井画、高野山や相国寺に襖絵を描くなど、当時高い評価を得ていました。住まいは延享5年版「難波丸網目」によれば「天満小ジマ町」でした。

「蘭亭曲水図」襖 紙本墨画淡彩 6面 176.7×96.3cm(4面)、176.8×115.8cm(2面)



蘭亭曲水図

中国の晋の永和9年(353)春3月、王羲之の住む蘭亭に時の名士41人が集まり、禊をおこない曲水の宴を催しました。曲水の宴は流水に盃を流し、自分の前に来るまでに詩を詠み、できなければ罰に盃の酒を飲み干すという遊びです。この時の詩集に王羲之が序を付けたのが「蘭亭序」で、書道のお手本として大変有名です。曲水の宴は日本にも伝わり、和歌を詠む遊びとなりました。

ここでは襖6面にわたり右上から左下へと流れる水を配し、その両岸に詩を吟ず

る人々を描いています。さらさらと筆を走らせる人、苦吟する人、嬉しそうに罰杯を飲み干す人など、一人一人の性格が丁寧に描き分けられています。江阿弥は高野山の南院に「四季耕作図」襖、相国寺塔頭の大光明寺に「山水図」襖を描いており、大画面に優れた画技を發揮しました。いずれも伝統をふまえた真体の山水人物図です。本図も規矩の正しい真体図ですが、ゆるやかな水の流れや、酒を楽しむ表情豊かな人々を配し、春の駉蕩とした気分を表しています。落款に「法橋翠松庵江阿

弥画」とあり、法橋に叙せられた充実期の作品であることが分かります。



蘭亭曲水図 部分

「西王母・双鶴図」 絹本着彩 3幅1対 明和4年(1767) 各102.2×34.0cm

西王母は中国の伝説上の女神です。古くは半獣半人の姿とされましたが、のちに仙女と考えられるようになりました。周の穆王が西に狩りをして崑崙山で西王母に会い、楽しさのあまり帰るのを忘れたという話や、漢の武帝が長生を願っていたところ、西王母が現われ仙桃を与えたという話があります。西王母の仙

桃は3千年に1度だけ実をつけ、実を食すると長命を得るとされました。『西遊記』の孫悟空は、西王母の蟠桃園の桃を食い荒らし、強大な力を得たことになっています。西王母は長生を司る美しい女神として民間信仰で人気を集め、中国や日本の絵画に描かれました。

ここでは桃の花をとる女神と、仙桃

を捧げ持つ侍女が桃樹の前に描かれています。左右幅には松竹と鶴を描き、華やかな吉祥の図柄を構成しています。お正月や桃の節句などに飾られたのでしょうか。

『巖島絵馬鑑』という本には宝暦12年(1762)奉納の「神馬図絵馬」に「法眼江阿弥」の落款があったと記します。しかし、明和2年(1765)に曾根天満宮(高砂市)に描いた壁画は残らず、他の法眼落款の作品も年紀が不明でした。ところが本図には「翠松庵法眼江阿弥行年七十五翁」という落款があり、行年書から明和4年75歳の作であることが分かります。

巖島の絵馬は「肥前侍従宗教」すなわち佐賀藩6代藩主、鍋島宗教が奉納したものです。法眼となった江阿弥は大坂の代表的な絵師として、西国大名の注文にも応えていたのです。安永6年(1777)版『難波丸網目』には江阿弥の記述がなく、すでに他界していたと推定されています。本図は法眼時代の最晩年の作として、また唯一の美人画として、貴重な作品といえるでしょう。

(岩間 香 摂南大学教授)



西王母・双鶴図

西王母・双鶴図 部分

うら話

見どころ

大阪くらしの今昔館が設計段階からこだわった展示の中身や、ふだんは気づかない展示の裏側をご紹介します。

「長屋横のチャボ」

町家展示室の中には、さまざまな仕掛けを作ってきました。特に子どもたちに興味を持っていただきたいという観点から、動物と生き物にこだわりました。路地の犬・庇の猫・物干しにとまる雀、台所のヤモリ・蜂の巣・トンボ・ツバメの巣・ネズミなど本来の町にいそうなものをピックアップして検討を重ね、具体化しました。その中で最も苦労したのが、今回紹介するチャボです。

このチャボは、路地を入った裏長屋の横にいます。つがいです。当初の設計では、ニワトリぐらい飼っているだろうという設定。しかし、追究し始めるとなかなか答えが出ません。まず、本当にニワトリでいいのか?という点。現代とは違い、日の出とともに起きる町ですから、それは大丈夫。次に本当にニワトリか?という点。ニワト

りも多種におよび一体どの種類を設定すべきなのか、これもなかなか答えが出ません。そこで考え出したのがチャボ。それほど大声ではない。鳥の卵といえば、当時はかなり高価なものであったはず。滋養です。さらにニワトリの種類が確立していったのは江戸時代中期以降であろうという想定。つまり、観賞用の鳥が作られていったという事実です。そうした中にチャボも位置づけられます。そして、このチャボは誰が飼っているのか?という疑問。そこで長屋の世話人的存在である義太夫語りの松太夫にすることで解決。観賞用と卵を入手する余裕があったのが松太夫であったこととすることで着きました。

次は、製作の問題に直面。どんなチャボなのかで喧々囂々。そこで、動物園で観察しようということになりました。関西でチ



ャボを飼育しているのが京都市動物園。学芸員や製作者が連れ立って一日中チャボを観察している姿は、子どもたちにどのように映っていたのでしょうか。しかし、このチャボはいわゆる純血種であり、チャボでは文化財級なわけです。そんなものを松太夫が飼えるはずがない。さあ、交配種を探せ。一月かけて探し回ったところ、京都の周山でチャボを飼育している方を見つけ、交配種であることを確認。頼み込んで一週間だけモデルとなっていただきました。現在の純血種・狸々桂チャボに似た姿でありOKとなりました。しかし、心残りなのは一週間もモデルとなっていただいたため、ストレスがたまっただけでしょうか。10日後に死んでしまいました。学芸員の仕事は残酷でもあります。

(学芸員 明珍健二)